

Lady Mary Wroth の作品からみた Shakespeare:

21 世紀に向けた文学・文化批評の可能性

大学院英文学専攻課程協議会

第 34 回 研究発表会 (2000 年 11 月 25 日)

〈講演録〉

楠 明 子

I

20 世紀後半には、Deconstruction, New Historicism, Cultural Materialism, Feminism といった、さまざまなポストモダンの文学・文化批評が台頭し、これまでの文学や文化の研究に大きな見直しが試みられました。恐らく、今から数十年、数世紀を経た後に書かれる文学史、文化史においては、1970 年代以降のこの時代は 20 世紀を特徴づける最も知的に豊かな、また激動の時期のひとつとして、記録されることでしょう。その時期に、私も、そしてこれから 21 世紀を担っていく皆さんも、この分野の研究に携わることができたのは非常に幸運なことだったといえましょう。

ポストモダンの批評はどれも大きな影響力をもっており、それぞれが互いに深く関わっているので、その意義を分け離して考えることはできません。ましてどの理論が最も大きな変化をもたらしたかなどと単純に言うことができないのは当然です。しかし、Shakespeare 批評に関してと範囲を狭め、敢えて言わせていただくなれば、20 世紀の Shakespeare 批評を大幅に変える最も大きな原動力となったのは、フェミニズム批評だったと私は考

えております。1970年代に欧米で台頭したフェミニズムは Shakespeare 研究にも大きな影響を与え、1975年には女性に焦点を合わせた最初の研究書である Juliet Dusinberre の *Shakespeare and the Nature of Women* が出版されましたが、これをきっかけに、欧米でさまざまな方法論により従来の Shakespeare 解釈の見直しが試みられました。最近では Queer Theory, Post-colonialism の理論とも関わり、gender、人種、階層の観点から、刺激的な Shakespeare 批評が次々と生み出されています。

フェミニズム批評は、他のポストモダンの文学・文化理論と深く関わりながら、今や Shakespeare および近代初期のイギリス文化を研究する誰にとっても無視できない、いわば mainstream のアプローチとなりました。その研究は Shakespeare 作品の上演にも大きな影響を与えてきました。そして、この分野のフェミニズム批評自体の動向もこの20年余りの間に大きく変わってきました。初期のフェミニズム批評が、英国ルネサンス期の父権制社会における犠牲者としての女性の表象を中心としていたのに対し、この10年ほどは、社会の圧力に対する女性の反応 (reaction) よりも、むしろ多くの制約にも拘らず女性がいかに自己成型を模索し、そのために積極的に何をしたとして作品のなかで表象されているかに焦点を合わせる研究が増えてきました。

この変化をもたらした要因として、ルネサンス期の女性作家の存在が挙げられます。従来、フェミニズム批評の視点から英国ルネサンス文化を研究する場合には、大きな障害がありました。その障害とは、英国ルネサンス期の女性自身の書き残したものが数少なく（これにはもちろん物を書くこと、さらには出版という行為が女性にふさわしくないとされた当時の gender 観が強く影響しているのですが）、また書かれた作品も出版されずに manuscript の形で残されているか、出版されてもその後再版されることがほとんどなかったということです。しかも、Shakespeare が女性の心理に対してどんなに洞察力が鋭く、どれほど豊かな言葉で女性登場人物の心の動きを描いていても、女の役を演じたのは少年俳優でしたから、Shakespeare の作品に女性自身の声を直接聞く機会はほとんどなかったと

言っても過言ではありません。

ところが、1980年代の後半から1990年にかけて、特にアメリカで、英国ルネサンス期の女性作家の書き残した manuscript や、初版が出た後何世紀もの間再版されることのなかった作品が、主にフェミニスト学者の努力により次々と刊行され始めました。20世紀末になって、4世紀以前のルネサンス期の女性自身の声を初めて聞くことができるようになったというわけです。男性作家が描いた女性と、女性作家が描いた女性とを突き合わせてみるにより、この時代の gender 観がいかに形成され、プロテスタントの父権制社会のなかで女性が自らの主体をどのように認識し、限られた可能性のなかでいかに生きることを人間の尊厳として捉えていたかが初めて見えるようになり、英国ルネサンス文化を全面的に見直す契機となりました。新たな視点からの研究は、今日の複雑な社会に生きる私たち自身の文化や自己形成のあり方にも多くの示唆を与えてくれます。この新しい動向は、20世紀最後の10年間に Shakespeare 研究においてフェミニズム批評がなした偉大な業績だと私は考えています。

本日は、非常に限られた時間内ではありますが、英国女性初の散文ロマンス作家でソネット詩集の作者でもある Lady Mary Wroth の作品と、Shakespeare の作品を突き合わせてみると何が見えてくるかを、ほんの少しではありますがお話ししてみようと思います。

II

Lady Mary Wroth については、ルネサンス研究をご専門とする方以外、ほとんどの方がご存知ないかと思います。Sir Philip Sidney の弟、Robert Sidney の長女として、Mary は1587年頃に生まれました。従って彼女は Philip Sidney と、そして Philip の死後 *Arcadia* を編纂し、自らも詩の翻訳を残した Mary Sidney Herbert (Countess of Pembroke) の姪でありました。英国ルネサンス期の文字通りエリート貴族の生まれで、1604年9月に Robert Wroth と結婚するまで、Mary は Sidney 家の館である Penshurst

Place で豊かな教養を身につけました。ダンスや音楽の才能にも恵まれ、15歳の時には Elizabeth I 世の御前でギャリアードを踊り、女王の賞賛を浴びたという記録が残っています。結婚後は国王 James I 世の王妃、Queen Anne の側近の一人となり、Ben Jonson 作の宮廷仮面劇、*The Mask of Blackness* (1605)、*The Mask of Beauty* (1608) を始めとして、宮廷で上演された仮面劇のいくつかに出演しています。読書と詩作を愛し、従兄であり恋人で後にはその庶子を生むことになる第3代 Pembroke 伯 (William Herbert) と、詩作の交換もしていたようです。1621年には、*The Countess of Montgomery's Urania** というタイトルの散文ロマンスを出版しましたが、このロマンスの最後には、主人公の名前を用いた *From Pamphilia To Amphilanthus* というソネット詩集がつけられています。これは英国史上、女性による最初のソネット詩集だといわれています。

Urania に登場する人物の多くは当時の宮廷人をモデルに描かれたらしいので、モデルにされた人たちにとっては大変迷惑な話であり、この作品が刊行されるとたちまち宮廷で大スキャンダルとなりました。騒動があまりにも大きくなったため、Wroth はバッキンガム公に「出版された本をすべて回収する」と約束していますが、本当に回収したのかどうか定かではありません。世界中で28冊が現存しており、そのうち2冊が大英図書館に収められています。このロマンスはフォリオ判で558頁という大著ですが、さらにその4分の3の量にあたる第2巻が、今も manuscript の形で Chicago の The Newberry Library に収められています。

Urania には、当時の文化のさまざまな側面が女性の視点から描かれています。*The Countess of Montgomery's Urania* というタイトル自体、伯父 Philip Sidney の長編ロマンス、*The Countess of Pembroke's Arcadia* を意識してつけられたことは明らかですし、*Urania* という女性は *Arcadia* の冒頭で、二人の羊飼いの憧れの女性として話題に上る人物でもあります。

Urania という散文ロマンスが男性作家による散文ロマンスと大きく異なる点の一つは、演劇的要素を大きく取り入れていることです。伝統的なロマンスは、narrator である羊飼いが自分や友人の恋愛のエピソードを

次々と語っていくのに対し、Wroth の *Urania* ではエピソードの多くが登場人物の会話で成り立っており、特に話し手が女性である場合が多いのです。しかも、女性同士の会話、また母親と娘の会話といった、当時の男性のロマンス作家があまり扱わなかった会話の形式を多く取り入れているのも特徴のひとつです。Wroth 研究の第一人者である Naomi J. Miller の言葉を借りると、「Mary Wroth は英国ルネサンス期の文化に女性の discourse と母親の discourse を取り入れた」のでした (Miller, 157)。

Mary Wroth は *Love's Victory* という、知られている限りでは英国女性による最初のパストラル・コメディも書いています。また、夫とともに宮廷生活を送っている間に、宮廷で上演された「仮面劇」のいくつかに参加していることは、すでにお話し致しました。さらに、1604 年 11 月 1 日、*Othello* が Whitehall Palace で上演された時には他の宮廷人と共に観劇した可能性が強く、また 1612 年に James 国王の娘エリザベスの結婚を祝して *The Winter's Tale* が宮廷で上演された時にも、恐らく観劇しただろうと言われています。しかも、文芸に秀でた人たちを多く輩出した Sidney 家の育ちで、芝居好きの第 3 代ペンブルック伯 William Herbert (1623 年に刊行された Shakespeare 劇の「全集」、*The First Folio* が弟の Philip Herbert とともに献上されている人物) と親しい間柄であったことから、Wroth が当時の演劇を強く意識しながら *Urania* を創作したことは容易に察せられます。

Wroth がとりわけ意識した男性作家の作品は、彼女の高名な伯父のロマンス、*Arcadia* であることは当然ですが、Shakespeare の劇も強く意識していたことが、Wroth の作品を検討すると明らかになります。

Othello や *The Winter's Tale* が宮廷で上演された際に Wroth が観劇した可能性が強いことはすでに申しましたが、実際に *Urania* には *Othello* や *The Winter's Tale* に似た situation や、登場人物の科白がかなり多く使われています。ほかにも *Romeo and Juliet*, *As You Like It*, *Hamlet*, *Macbeth*, *Antony and Cleopatra* といった Shakespeare 劇の科白の echoes と思われる箇所が多く出てきます。しかし Wroth は、それらを単なる状況の類似性や言葉の echoes にとどまらせるのではなく、それらが女性にとってどういう

意味をもっていたのかを明らかにするような描き方をしています。たとえば *The Winter's Tale* には、自分が実はシシリア王国の王女であることを知らずにボヘミア王国の王子の Florizel と恋仲になる羊飼いの娘、Perdita が登場します。*Urania* にも、自分が王侯貴族であることを知らない羊飼いの娘、Urania と Veralinda が登場します。

Urania は、それまで羊飼いの娘として幸福な年月を過ごしてきたのに、育ての親から突然、実の子ではないことを聞かされ、自分が何者かわからなくなってしまいます。Wroth のロマンスは *Urania* の自己喪失感と戸惑いで始まるのです。それに対し、Shakespeare の描く Perdita は自分が王族の出身だと聞かされても、突然見舞われた identity の喪失に戸惑うどころか、その結果両親と再会でき、Florizel との結婚が可能になったことを喜び、*The Winter's Tale* はハッピー・エンドとなります。このように、女性の自己認識に対して、Wroth には Shakespeare と全く異なる姿勢が見てとれます。Wroth のロマンスに登場する *Urania* や Veralinda は、自分がそれまで identity の基盤としていた「生まれ」を失った時、一体自分は何者なのかということ、また自分が生きていかななくてはならない社会において、女であるとはどういうことなのかという問題、すなわち gender と自己認識の問題を、Shakespeare や Sidney を始めとする男性作家が創り上げたジャンルや discourse を利用しながら、しかもそこで想定されている通念を覆しながら、探究していきます。

Urania という作品では、英国ルネサンス社会における常識や通念が女性の視点から書き換えられています。特に結婚については、*Urania* で描かれる女性からみたその実態と Shakespeare が描く結婚の表象は、大きく食い違ってきます。

Urania では、自分の意思に反した結婚をさせられ、深く傷つく女性の話が数多く扱われています。しかしその多くは、プロテスタント父権制社会のシステムによって女性がいかに翻弄されるかという問題に焦点を合わせたものではなく、その現実のなかで、女性が自らの主体をいかに形成しようとしたかという過程を強調しています。

17世紀初期のイギリス社会において、「結婚のディスコース」は大きな矛盾をはらんでいました。妻に夫を「頭」(“head”)とした絶対的な「従順」,「寡黙」,「貞節」を要求する伝統的な gender 観が、社会の規範として依然として大きな力をもっている一方で、プロテスタント、特にピューリタニズムの教義の影響で、男女の互いの理解, “mutuality” を, 「結婚」の重要な要素として捉える考え方が広がりつつありました。プロテスタントの教義では、妻には結婚生活での夫の “helpmate” という大きな役割が与えられたのです。このような風潮の下で結婚に対する女性の期待が高まる一方で、社会では相変わらず父親、夫といった家父長の権威が絶対視され、女性が自分の考えを現実社会で行動に移せる機会はきわめて限られていました。特に貴族やジェントリーといった上流階層では経済的条件が結婚に大きな影響を及ぼし、相変わらず父親や後見人が、当人の意思を考慮せずに arranged marriage を仕組む比率が圧倒的に高かったのです。シドニー家という、当時としては最も知的な家庭環境に育った Mary でさえも、従兄の William Herbert という恋人がいたにも拘らず、1604年に両親の決めた結婚で、Essex 州の富裕な地主の長男、Robert Wroth のもとに嫁いでいます。

16世紀末から17世紀にかけてのイギリス社会での「結婚」は、家父長の絶対的権威に個人の意思が組み込まれていく過渡期にあったといえます。この時期、特に自己認識を高めつつあった女性にとって、「結婚」はさまざまな問題を提起しました。Shakespeare の作品の多くが「結婚」をテーマにしているのは、作家自身の問題意識もさることながら、観客の関心を意識した結果であるといえましょう。Urania で扱われているエピソードのほとんどは「恋愛」と「結婚」に関するものですが、Shakespeare 劇と異なる点は、Shakespeare が (特に喜劇において)、最終的には社会が想定するとおりの結婚の形で幕を閉じているのに対し、Wroth がエピソードの多くで結婚後の男女の関係を扱っていることです。結婚後の夫婦の関係を扱った数少ない Shakespeare 作品のなかに、Othello と The Winter's Tale (両作品とも Wroth が上演を観ていた可能性が強い) がありますが、理不尽な状況に

追い込まれた Desdemona や Hermione は、自分の置かれた状況を美しい言葉を用いて受け入れることはできても、Wroth の作品中同じような状況に置かれた女性たちと異なり、自分の見解を自分の言葉で述べる機会ほとんど与えられていません。Urania は、ルネサンス期のイギリス社会における「結婚のディスコース」に対し、当時の女性自身がどのような想いを抱き、彼女たちの自己形成の過程でこのディスコースがどのような意味をもったのかを私たちに示唆してくれる貴重な資料となっています。

「結婚」に関し、さらに三つのテーマにしばって、もう少し考えてみたいと思います。

(I) 強制結婚 (enforced marriage)

1604 年に出された King James の布告にもあるように、17 世紀初期のイギリス社会では、父親が娘に結婚を強いることは理論上はよくないとされていましたが、現実には相変わらず、特に貴族の間で、普通のこととして行なわれていました。

Romeo and Juliet (1596)、あるいは *A Midsummer Night's Dream* (1595-6) には、父が決めた結婚に同意しようとしないう娘が、家父長としての権威を主張する父から勘当されそうになる場面が出てきます。

Romeo and Juliet のなかでは、良家の箱入り娘から男性を真剣に愛する一人の女性へと成長していく Juliet が見事に描かれています。しかし彼女には、両親や婚約者の Paris に向かって Romeo への愛を自分の言葉で説明し、父の強いる結婚がいかに関心の心にそわないのかを述べる機会とは与えられていません。同様に *A Midsummer Night's Dream* に登場する Hermia も、父 Egeus や主君 Theseus に自分の置かれた状況の不条理さをきちんと説明することなく、Lysander とアテネ郊外の森へと駆け落ちしてしまいます。

Urania という作品には、父親に強制結婚させられる女性がたくさん登場します。そのうちの一人、Limena は、愛を誓い合った Perissus という立派な貴公子がいるにも拘らず、父親によって、裕福な Philargus という男性に

無理やり嫁がされてしまいます。*Urania* で描かれる、強制的に結婚させられた女性たちの特徴は、肉体的には夫の所有物となっても、恋人を愛し続ける自らの「主体」をもち続けていること、すなわち「妻」と「愛人」という分離したアイデンティティをもち続けていることです。そのなかには *Lady Pastora* のように、結婚前の愛人との不倫 (adultery) の関係を結婚後も続けていても、不倫を自分の誠実さ (Constancy) の証しとみなし、罪の意識を感じない女性も登場します。別の女性、*Liana* の場合は自分の口から父親に、自分の意思に反した結婚を強いないように頼みます。

my Father call'd me to him, telling mee, what a match he had made for me, and not doubting of my liking, shewed much comfort which he had conceivd of it, and so went on with joy, as if the marriage had beene straight to bee consummated. I was, truly, a little amazed withall, till he finding I made no answere, pulling me to him, told mee, hee hop'd my silence proceeded from no other ground, then bashfulnesse, since he assur'd himselfe, I would not gainesay what he commanded, or so much as dislike what he intended to doe with me, wherefore hee would have mee joyne my dutifull agreement to his choice, and order my love to goe along with his pleasure, for young maides eyes should like onely where their Father liked, and love where he did appoint. This gave me sight to my greater mischiefe, wherefore I kneeld downe, words I had few to speake, onely with teares I besought him to remember his promise, which was, never to force me against my will, to marry any. (Wroth, 247-8)

強制的に結婚させられた別の女性の *Bellamira* は、自分のアイデンティティの分裂を自分の言葉で表現します。

But this finished, the marriage followed: what torture was it to mee, standing betweene my love, and Treborius, when I was to give my selfe from my love to him? How willingly would I have turned to the other hand: but contrary to my soule I gave my selfe to him, my heart to my first

love. Thus more then equally did I devide my selfe. . . . (Wroth, 388)

また別の女性、Lisia は、夫に不満をもち自分の identity が夫に包含されないことをはっきり述べています。

“I am,” said she, “that unhappy Lisia, who was by birth, and greatnesse of estate, sought before I had knowledge, and given before discretion was appearing in me, to a great Lord; I thought it (as most women doe) a gay matter to be great, a Duches me thought was a rare thing, and a brave busines: but all that while I marked not the Duke, who was, and is, as dull a piece of flesh, as this, or any Country neede know; besides he hath had such unsufferable passions, and passages with me, as truly if I had not given my selfe to hunting, and such delights abroad, to take away the trouble I had at home, I must have suffered like a Martyre under his churlishnes. . . . (Wroth, 559)

初めにお話しした Limena の場合は、心を閉ざしたままの妻に疑惑をもった夫の Philargus が詰問すると、彼女は、肉体は夫のものでも心は別の男を愛していると、しっかりと自分の言葉で告げます。当時の結婚観では、結婚後は妻の肉体ばかりか心も夫の所有物になると考えられていたので、Philargus は嫉妬に狂い、残酷な拷問を加えて、妻の心のなかに存在する自分の所有物にならない内面 (interiority) を消し去ろうとしますが、彼女は自分の言葉を用いて、夫に心を与えることを拒絶します。

“Once every day hee brought mee to this pillar where you found me, and in the like manner bound me, then whipt me, after washing the stripes and blisters with salt water. . . . Thus my Lords have you heard the afflicted life of poore Limena, in whom these tortures wrought no otherwise, then to strengthen her love, and faith to withstand them: for could any other thought have entred into my hart, that would have been a greater affliction to my soule, then the curst stroakes were to my body,

subject only to his unnaturalnesse, but now by your royall hand redeemed from misery, to enjoy the only blessing my heart can, or ever could aspire to wish, and here have you now your faithfull Love Limena.” (Wroth, 88)

Limenaのエピソードには、父親によって強制された arranged marriage がいかに大きな犠牲を女性に強いたかが、説得力をもって描かれています。しかし、Wrothが強調しているのは、自分の心を夫に与えることを拒絶するという行為を通し、絶対に人に渡すことのできない自己を確認していく Limena の自己形成の過程であるといえます。それに対し、Shakespeare の描く Juliet や Hermia が、恋愛の経験を通してそれぞれの「主体」(subjectivity) を形成していくかという点、疑問の余地があると思います。

(II) 結婚の成立の形態: *De Praesenti Contract*

16, 17 世紀の演劇で「結婚」のテーマが多く取り上げられた背景には、当時の結婚の契約に関する混乱状態があるといえます。当人同士が誓いの言葉を交わしただけで成立した「結婚」(*de praesenti contract*) が、教会の儀式を通して正式に行なわれた「結婚」(*de futuro contract*) と同じ効力を持ちうるか否かというのは、当時、深刻な社会問題でした。Lawrence Stone は、すでに 16 世紀末には *de praesenti contract* はほとんど力をもたなくなっていると論じていますが、17 世紀に入っても実際には、特に arranged marriage が普通であった貴族の間では、父の意思に背いた結婚をこの方法で成し遂げようとしたカップルが多かったようです。Mary Wroth 自身も Robert Wroth との結婚以前に William Herbert と *de praesenti contract* を結んでいた可能性が強いといわれています。

Shakespeare は *Measure for Measure* で、また John Webster は *The Duchess of Malfi* でこの問題を取り上げています。

Measure において Juliet の妊娠は、Claudio とすでに *de praesenti contract* を結んでいるのだから無罪であると本人たちは主張しますが、プロットの

運びの上では「罪」として扱われています。また Angelo と Mariana の *de praesenti contract* は、ベッド・トリックを正当化するために Mariana の主張が認められてはいるものの、彼女の持参金が充分でないという理由で契約を無効にした Angelo の言い分は、劇社会では一般に認められているようです。

Webster は *The Duchess of Malfi* において、身分違いの Antonio と *de praesenti contract* で秘密結婚し、子供までもうける Duchess を実に魅力的に描いてはいますが、この結婚そのものには一貫して曖昧な態度をとり続けています。

Urania にも、*de praesenti contract* により秘密結婚する多くのカップルが描かれています。秘密結婚をしたあと、女性に何が起こり得るかという問題に注目しているのも *Urania* の特徴のひとつです。当人の死を招く場合もあれば、相手の男性に裏切られてしまう場合もあります。*Urania* において *de praesenti marriage* という危険な賭けは、女性が自己を形成するために自らにしかける極限状態として描かれているように思われます。運命の巡り合わせや相手の男性の裏切りで、必ずしも幸福な結末とはなりませんが、Wroth は、秘密結婚を敢えて行なう女性登場人物の自己認識の形成に焦点を合わせ、時には、「主体」(subjectivity) を確立しようとする女性にとって最も大事なものは当人同士の想いであって、教会の儀式による「正式の結婚」という形は何の意味ももたないということを、大胆に示唆さえしているのです。

(III) 男性の心変わり

Urania では、女性の心変わりもいくつかのエピソードで扱われていますが、圧倒的に男性の心変わりの方が多く取り上げられ、女性に与える心理的な影響が深く追究されています。*Urania* に登場する男性の多くは複数の女性を愛する状況に陥り、多くの女性登場人物が男性の心変わりに傷つきます。その典型的な例が主人公の Pamphilia と Amphilanthus の関係です。

二人の関係は、何よりもその名前が示しています。Pamphilia はギリシャ語で「すべて愛」, “All for Love” を意味するのに対し, Amphilanthus は「二人の恋人」, “lovers of two” を意味します。ナポリ王国の国王 Amphilanthus は武勇にすぐれ、寛大で勇敢な心の持ち主で、容姿は美しく、そのうえ詩作を愛するという、当時の価値観からみれば男性の美德すべてを体現したような男なのですが、パンフィリア王国の女王 Pamphilia を心より愛しながらも、常に別の女性を同時に愛し、Pamphilia を悲しませます。Pamphilia は Constancy, 「忠実さ」こそが人間の最高の徳であると主張して、それでも Amphilanthus を愛しつづけます。Pamphilia の親友の Urania は、「忠実さ」を追うあまり自己を傷つけるのであれば、それはもはや価値ではない, “That fruitless thing of Constancy” と Pamphilia に忠告します。しかし Pamphilia は、相手が自分を愛するから愛するというのなら、その愛の対象は自分自身である。真実の愛とは、相手の気持ちに関わりなく自分自身の想いにあるもの、と主張します。

To leave him for being false, would shew my love was not for his sake, but mine owne, that because he loved me, I therefore loved him, but when hee leaves I can doe so to. O no deere Cousen I loved him for himselfe, and would have loved him had hee not loved mee, and will love though he dispise me; this is true love. . . .

“Tis pittie,” said Urania, “that ever that fruitlesse thing Constancy was taught you as a vertue, since for vertues sake you will love it, as having true possession of your soule, but understand, this vertue hath limits to hold it in, being a vertue, but thus that it is a vice in them that breake it, but those with whom it is broken, are by the breach free to leave or choose againe where more staidnes may be found; besides tis a dangerous thing to hold that opinion, which in time will prove flat heresie. (Wroth, 470)

このように Pamphilia の忠実な愛は、相手の Amphilanthus に向けられるものから、Amphilanthus を超えて自分自身に向けられるものへと発展し

ていくのです。

Shakespeare も男性の裏切りを喜劇や悲劇で扱っていますが、秘密結婚と関わって最も悲劇的な結末を生み出すのは、Othello の裏切りと言えるでしょう。しかし Shakespeare は、Desdemona が夫に「娼婦」と呼ばれ、人前で殴られ、その挙句に殺されることになっても、Othello への彼女の愛を自己認識のきっかけとしては扱っていません。Pamphilia と違って Desdemona は、これほどの目に遭っても、Othello に対する自分の愛が自らにとって何を意味するかということを深く考えることをしません。四幕三場、一般に“The Willow Scene”と呼ばれる場で交わされる Desdemona と Emilia の会話は、Pamphilia と Urania の会話を想起させます。しかし、Desdemona の純粹さが美しく描かれてはいても、Pamphilia と Urania の会話と異なり、彼女の自己認識の過程を観客に示すものとはなっていません。

家父長に強いられた強制結婚を拒絶すること、*de praesenti contract* によって秘密結婚をすること、男性の裏切りにも拘らずその男性を忠実に愛し続けることは、当時の社会で生きていく女性には大きなリスクをもたらしました。Mary Wroth は、自分とは性格や趣味の異なる Robert Wroth と結婚した後も、常に複数の女性を愛していた William Herbert との関係を続け、夫の死後は Herbert の庶子を二人生み、1621 年には *Urania* を刊行するなど、次々と騒動を起こし、結局宮廷から追放されてしまいます。その後、Wroth がどのような人生を歩んだかは未だに闇に閉ざされたままです。Wroth 自身がリスク続きの人生を送ったことと、*Urania* に登場する女性の多くが自己を確認するためにリスクの大きい人生を選んでいることとは、決して無関係ではないように思えます。人間観察のすばらしい才能をもっていた Shakespeare ですが、女性の心の動きを舞台の上で表象するのに男性（少年）俳優しか使うことができず、また社会規範に反逆する同時代の女性の心を男性の視点から見る機会が多かったせいでしょう、女性による自己形成の試みがこの時代にどのような意味をもっていたかという認識においては、限界があったように思われます。

Mary Wroth が扱った、「結婚」と女性の自己認識との軋轢は、その後、Margaret Cavendish, Aphra Behn, そして Jane Austen, Brontë 姉妹、やがて現代の女性作家へと引き継がれていく重要なテーマとなりました。

III

間もなくやってくる 21 世紀においても、さらに多くの視点が導入されて、文学・文化が考察されていくことでしょう。ある時代の文学・文化の一面を、全く別の視野から検討することで生み出される複数の「真実」を認識することは、さまざまな民族、さまざまな言語や思想をもつ人間が共存していかなければならない 21 世紀において、時代の根幹を創り上げる重要な行為につながります。

同時に、次の世紀の学問を担っていく若い皆さんは、英米文学・文化の研究から、「日本における」という括弧をはずしていかなくてはなりません。そのためには、この分野の研究を、作品・批評の単なる翻訳や、外国から輸入した批評の批評、いわゆる「メタ・クリティシズム」にとどまらせることなく、皆さん個人の視点を世界における視野へと発展させ、広く人間の営みとしての文学・文化の研究に大きく貢献していただきたいと思います。ご健闘を大いに期待しております。

* The Countess of Montgomery とは、Philip Herbert (Montgomery 伯。William Herbert 亡き後、第 4 代 Pembroke 伯となる) の最初の妻、Susan Herbert のことで、*Urania* 中の *Urania* は彼女をモデルにしているといわれている。Susan Herbert 自身も詩作をし、Wroth とは大変に仲がよかったという。Philip Herbert とは *de praesenti contract* で秘密結婚をし、その後 1604 年 12 月 27 日に、教会における正式な結婚式を挙げている。

Works Cited

- Miller, Naomi J. "Engendering Discourse: Women's Voices in Wroth's *Urania* and Shakespeare's Plays." *Reading Mary Wroth: Representing Alternatives in Early Modern England*. Ed. Naomi J. Miller and Gary Waller. Knoxville: The University of Tennessee Press, 1991. 154–72.
- Wroth, Mary. *The First Part of The Countess of Montgomery's Urania by Lady Mary Wroth*. Ed. Josephine A. Roberts. Binghamton, New York: Medieval & Renaissance Texts & Studies, 1995.